

特別賞 福井新聞社長賞

「この夏の体験を通して感じたこと」

越前市武生第二中学校 二年 川端 祥太

僕はこの夏、青年会議所主催の劇に参加することになりました。題名は「星空のかなたに」で、テーマは、きっと…忘れないと思う、大切な「こころ」です。アジアの発展途上国で迷子になった日本のスポーツ少年団の子供達が、ストリートチルドレンと呼ばれる現地の子供達と生活をともにしたのはたった一日。しかし、そこで体験した現実が想像を絶する世界で、少年達は何を感じ、何を日本に持ち帰ったのだろうかという内容です。最初にこの劇に参加すると決まった時は、テーマの意味があまりピンときませんでした。僕の今までの知識の中には、彼らの事や発展途上国の現実などがあまりなかったからです。

まず活動の最初の時間に牧野佳奈子さんという方に会い、話を聞くことになりました。牧野さんは福井県出身で、今はNPO活動にボランティアとして参加されています。自分で撮影されたビデオで、アジアのある国のストリートチ

ルドレン達の様子を見せてくださいました。ゴミ山という汚い所で生活している姿、ガリガリの腕や足、それと対照的な腹、ビデオで見た子供達のキラキラした目を見た時、僕はなぜか、少し恐怖感を覚えました。今の自分達の暮らしとは比べものになりません。その中で生きていかなければならないというのは逆の意味ですごいと思いました。戦争で大変な国は、テレビ等で見たことがありましたが、こんな世界もあるんだと驚きました。ここには僕の理解している範囲ですら、人権というものは全く感じることはできませんでした。

活動が進み、僕はストリートチルドレンの役に決まりました。最初この恵まれてる環境でしか生きていない僕が、この役を演じられるか心配でした。

台本を読み込むにつれて、自分達とのギャップにさらに驚きました。

一つには食事です。ホテル等の残飯がごちそうなのです。本当にご飯がない時は、ビニールのひも等をしゃぶって空腹をまぎらわせます。僕にとって残飯はゴミで、それも他人のものが混ざっているのです。ゴミを食べているかと思うと、役とはいえ、口を開けるのが気持ち悪くなりました。それを食べなくてはならない程、空腹になった事もなく、そうなったらどうするかという事も考えたことはありませんでした。ましてやビニールのひもをしゃぶるなんて…。その役になった小さい子も初めは照れくさそうにまねをしていました。何回も

練習するにつれて、僕はその姿を見るのが嫌になりました。指導してくださる先生やスタッフの人達も、どのシーンまでをやるべきなのか、みなさんが悩んでは、相談されていました。

二つ目に健康です。食事もろくに食べられないので、体の抵抗力がなく、すぐに病気にかかってしまいます。十才までに半分、十五、六才までにその半分くらいの子供達が死亡してしまうということでした。まして不衛生な所で暮らしているのではなおさらです。セリフに、「俺達は、これから運良く生き残れるかどうかの境目にいるってことだ。」というところがあります。自分だったら病気にかかってしまっただけで死んでしまうでしょう。

次に親との関係です。親に捨てられる方がましという子供達。生活のために親が子供を売るので。売られた男の子の中で、朝から晩までこき使われるのはまだいい方で、下手すると臓器移植のために外国に売り飛ばされ、女の子は体を売らされます。それだったら捨ててもらって、自分達で生きた方がまだましだということです。親は子供のためを思って捨てる。想像もつかない世界です。

劇の終盤で、彼らは捕まってしまいます。それは助けたはずの日本の子供達に対しての誘拐、窃盗、拉致、監禁等、たくさんの罪です。彼らには全く人

権が認められていないように思いました。国が違うから仕方ないことなのか、それとも僕達が幸せなのか、よく分かりません。

人権が守られる日本でさえも今、子供に対する虐待が増えています。特に育児放棄は、生活に困ってのことではありません。親の身勝手に命を落としている子供がいるなんていったいどういうことなのでしょう。ストリートチルドレンの言葉に「親を恨んではない。捨ててくれた人だから。」とあります。僕は何がなんだか分からなくなります。捨てられて、自分で生活して、それでも死んでいく子。恵まれて生まれても、愛されず、死んでいく子。ここに人権ってあるのでしょうか。

今は多くの人に劇を見てもらい考えてもらえたらいいと思っています。このような体験が出来るととても良かったです。僕はたくさんの周りの大人に愛されてるし、恵まれてることが分かったからです。